

# 大学生における怒り経験とその規範逸脱性についての検討

長 澤 里 絵<sup>\*1</sup>・齊 藤 勇<sup>\*2</sup>

## A Study on the Experience of Anger and the Deviancy of Norm in University Students

NAGASAWA Rie and SAITO Isamu

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the experience of anger in university students and its deviancy of norm, as well as, the relation between the feeling of anger, the deviancy of norm, and the anger expression styles. This study also examined the effect of the participants' closeness to the stimulant and the third party, if one existed, on the anger expression styles. The participants were 112 university students, 61 male and 51 female. The result of the classification showed the stimulant evoking the greatest anger feeling was "attitude and behavior" followed by "slander." Overall, the mean score of each anger expression style was low. However, the tendency to use the "sarcastic" expression style was found when the participants perceived stimulants with high deviancy of "social regulation" and "attention toward oneself." The study also found that the female participants tended to feel strong anger when the stimulants and the third parties were not close to them. Moreover, both male and female participants tended to use "ignore" style when the stimulants were not close to them, and use "indirect" style when the third parties were close to them.

[Keywords] anger experience, deviancy of norm, anger expression style

### 問題と目的

怒り経験とは、多くの人間ができることならば回避したいと願う不快感情のひとつである。これまで多くの研究者が、怒り喚起のメカニズム（例えば Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939；Berkowitz, 1962；Averill, 1982；大淵・小倉, 1984；大淵, 1999）やその表出（例えば Bandura, 1977；木野, 2000；阿部・高木, 2003）、喚起後の心理状態（例えば Bushman, 2002；日比野・湯川, 2004）など、多方面から怒りの研究を重ねてきている。約30年前、怒りの経験について Averill (1982) が調査し、その後この調査の追試研究を大淵・小倉 (1984) が日本で行なった。大淵・小倉 (1984) の調査によると、怒りは、人間が頻繁に感じる感情のひとつであり、約80%の人が過去1週間に1回以上怒りを経験していたことが明らかにされた。そしてほとんどの場合、怒りは他者の行動によって喚起されるが、この他者が見知らぬ他人であることはあまりなかった。さらに怒り喚起因を分類した結果によれば、身体的、物質的被害はわずかであり、欲求不満、プライド損傷、道義違反、期待に背くなどの心理的被害を知覚したことによる怒り喚起が65%以上を占めていた。

ところで、怒り感情とその表出を考える際の心理学的アプローチのひとつに、社会的構成主義の考え方にに基づき諸問題に対処しようとするアプローチがある（高木・阿部, 2006）。この社会的構成主義の代表的な研究者である Averill (1982) によると、怒りは欲求不満に対する反応のような原始的な感情ではない。怒り経験とは自分の属する社会における規則や慣習、文化的な背景に基づいて構成されており、すなわち、そこには故意性や不当性、権利や規則の侵害の認知が大きく関係していると考えられるのである（湯川, 2008）。

---

\* 1 立正大学大学院心理学研究科心理学専攻博士課程

\* 2 立正大学心理学部教授

感情を、社会的に構成された、社会的機能をもつものとするAverill (1982) は、感情のひとつである怒りに関しても、個々の原因のみならず、それを取り巻く社会を含めて捉えるべきだと主張している(高木・阿部, 2006)。この社会的構成主義の考え方に基づき湯川 (2005) は、怒りを「自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態」(p.107) であると定義した。この定義は怒りが認知的、生理的、進化的また社会的な側面からなる感情であることを考慮した、包括的な捉え方であると考えられるため、本研究では、この湯川の定義を用いることとする。

既述の、日本における怒り経験調査によると、怒りの喚起因が相手の道義違反の要素を含んでいると答えた割合は、実に80%にのぼっている(大淵・小倉, 1984)。このことは多くの調査対象者の怒りに故意性や不当性、権利や規則の侵害などの認知が関わっていたことになり、自分に対する被害の有無だけでなく、不公正の判断も怒り喚起に関係していることを証明している。不公正の判断と怒り喚起との関係は、この他にもいくつかの研究がなされており、怒りの原因のひとつであることが示されている(大淵, 1993)。

ひとは自分の住む社会で決められた規則や、その社会を共有する人々の間で、普通であるとか当然であると考えられている道徳や慣習の影響を日々受けている。これら規則や道徳、慣習は社会的規範と呼ばれ、ひとが行為の善悪について判断するための社会的知識の享有であると考えられている(大淵, 1999)。所属する社会が異なれば、当然その社会における社会的規範は異なり、正当性や権利、規則の侵害の判断基準も異なってくる。大淵 (1999) は、社会的規範を法律、規則、道徳、慣習の4つのカテゴリーから構成されていると考えた。大淵 (1999) によれば「法律」とは、国などの公的な機関が定めた規則であり、これに対する違反には罰が伴う。「規則」とは、会社を始めとする組織の就業規則や校則などのように、特定の集団内、社会的場面にのみ通用する限定的なものを指す。これらに比べ「道徳」とは、明文化されてはいないものの、ある文化圏内の人々に暗黙に共有されているルール、人間として守るべき規範である。また「慣習」とは、道徳のように明確ではないが、社会的場面において普通であるとか、あたりまえと人々が信じ、従っている慣習的な行動様式のことをいう。国やその他の公的機関が異なれば、それらが定める法律も異なる。また、会社、学校などの組織が変われば、規則も異なる。道徳や慣習も、社会や文化により大きく異なる。例えば「電車内では携帯電話による通話は控える」という列車内マナーは、現在の日本国内では共通した、守るべきルールであると言えよう。しかしアメリカでは、電車内での通話を禁止する車内アナウンスはなく、乗客もその緊急性を問わず車内での通話を行なっている。携帯電話による車内通話では国、文化的な違いがみられるが、これとは別に、世代の違いや家族、友人関係といった、より小規模な社会において固有に認められている規範というものも存在する。個々が属する社会により、基準となる社会的規範が異なるということはすなわち、社会的規範の逸脱行為に対する怒りも、属する社会により異なるということになる。

文化の差は、怒りの喚起に違いをもたらすばかりでなく、その表出においても違いをもたらすことが報告されている。日本人はイギリス人などに比べ、怒りの表出を抑制する傾向がみられると指摘されているのである(Argyle, Henderson, Bond, Iizuka, & Contarello, 1986)。日本人の怒り感情の表出方法を検討するため、木野 (2000) は大学生56名から自由記述方式により回答を得た。得られた回答を、KJ法を参考に分類し、7種類の表出カテゴリーを見いだした。それらは“表情・口調”(表情・口調など非言語的な部分でのみ怒りを示す)、“遠回し”(さり気なく遠回しに怒りを伝える)、“嫌味”(嫌味や皮肉を言う)、“理性的説得”(理由を説明するなど、相手の行動の非を理性的に伝える)、“感情的攻撃”(怒りに任せて、相手を責めたてる)、“無視”(相手を無視する)、“いつもどおり”(気にしていないかのように、平然と対応する)であった。それら7種類のカテゴリーのうち、遠回し、表情・口調、いつもどおり、といった抑制された、婉曲的な方法が最も頻繁に使用されていることが見いだされ、木野 (2000) の結果は、Argyle et al. (1986) の指摘する日本人の抑制的表出傾向を支持する結果となった。

このように、これまで得られた知見では一貫して、日本人の抑制的な怒り表出方法が指摘されている。しかし日本の社会では、目下の者への怒りの表出を頻繁に目撃する。これは日本人の間で、目下の者への表出が許容されているためであると考えられている(Matsumoto, 1990)。また、本来攻撃的反応に違いがあると言われる男女二者間において、攻撃の正当性や向社会性が認められた場合、その差異がなくなる可能性が示唆されている(Frodi, Macaulay, & Thome, 1977)。これらのことから、一般的に抑制的な怒りの表出方法を選択する日本人においても、より直接的で、明確な表出方法を選択することが正当であると認められる状況においては、必ずしも抑制的な怒り表出方法が用いられるとは限ら

ないと言えるだろう。

以上のことから本研究では、第1に大学生の怒りの喚起因を明らかにし、それら喚起因の規範逸脱の種類や程度を検討することを目的とする。このことにより、大学生の属する社会で基準となる社会的規範が明らかになるはずである。目的の第2として、怒りの強さや規範逸脱の種類、程度による、怒りの表出方法の違いの検討を行なう。相手の社会的規範の逸脱をより強く感じることで、怒りの表出の正当性が高まり、このことで、選択される表出方法に違いが生じる可能性が考えられるからである。第3に、怒り喚起の対象との親しさや、その場に居合わせた第三者の有無、第三者との親しさによる、表出方法の違いについての検討も試みる。怒り喚起場面に同じ社会に属する他者がいる場合、その者と同じ規範を共有していることにより、その規範の逸脱者に対して感じる怒りへの正当性が高まると考えられ、怒り感情抑制の必要性が低くなると考えられるからである。

## 方 法

調査対象：首都圏の私立大学に通う大学生145名を対象に、質問紙調査を実施した。そのうち回答に不備のあった33名を除き、18歳から22歳までの112名（男性61名、女性51名）に対し、以降の分析を行なった。

平均年齢は19.00歳（SD=1.01）

調 査 日：2011年1月と6月

手 続 き：大学の講義時間内に質問紙を配布、実施し、回収

実施時間は10分から15分

### 質問紙の構成

#### 1. 怒り喚起場面の想起

見知らぬ人を除く周囲の人に対して、最近もっとも強く怒りを感じた出来事をひとつ想起させ、その出来事で怒りを喚起させた怒りの対象、その対象との親しさ、怒りを感じた出来事、その出来事が起きた時その場にいた第三者、第三者との親しさを尋ねた。怒りの対象、第三者との親しさは「まったく親しくない（1点）」から「非常に親しい（5点）」までの5件法で回答を求めた。その他の項目については、自由記述方式で回答を求めた。また、その場にいた第三者については、複数回答も可とした。

#### 2. 怒りの強さ、規範逸脱、怒りの表出方法の評定

1. で回答した怒り喚起経験に基づいて、以下の項目について「まったくあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」までの5件法で回答を求めた。

- 1) 前述の出来事が起きた時の感情について、「相手に対して怒りを感じた」、「相手に対して腹が立った」、「相手に対してムカついた」の3項目を尋ねた。
- 2) 前述の出来事が社会的規範を逸脱していると思う程度について、大淵（1999）が作成した規範逸脱の知覚9項目を使用した。なお大淵（1999）は、得られた結果を因子分析し「社会的規則」、「対人的配慮」、「基本的規範」の3因子を抽出している。
- 3) 前述の出来事が起きた時にとった行動について、木野（2000）が7種類に分類した怒りの表出方法21項目を用いた。

## 結 果

#### 1. 怒り喚起場面の分析

最近もっとも怒りを感じた出来事において、その怒りを喚起させた対象を自由記述方式にて尋ねた結果、「友だち」と回答した者が46名（全体の41%）と最も多く、次いで「家族」（22名、20%）であった。その他「バイト先の関係者」と回答した者が12名（11%）、「恋人」と回答した者は6名（5%）であった。これら4対象は現代の大学生を取り巻く主な人間関係であり、今回の調査の77%がこれら主な人間関係の中で強い怒りを感じたということになる。

自由記述にて回答した怒りの対象との親しさについて、5件法で回答を求めた結果、「非常に親しい（5点）」と回答

Table 1 怒りを感じた出来事

<b>態度・ふるまい(18)</b> 酔っ払って自販機に向かって蹴ったり殴ったりしていた 足を組んで頬杖をつきながら、上から目線で話をされた 相手の話し方 体調不良を理由に、態度に出された 相手の口調の悪さ 友人の空気を崩すような態度 など
<b>悪口(11)</b> ブログ内に悪口を書かれた 自分の気になることを嘲笑い、大げさに指摘したから 友だち数人と一緒になって自分の悪口をひそひそ言われた 私のおその話を勝手につくって言いふらしてる。とにかく人の悪口がひどい など
<b>相手の身勝手さ(8)</b> 私が忙しい時やリラックスしたい時に電話をかけてきて、一方的にどうでもいい話を長時間話し続けていた 朝の用意が遅いと言われたが、相手の方が遅く学校に遅れてしまった 無断でバイトを休まれたので、自分一人で店を回さなくてはいけなくなった など
<b>理不尽(8)</b> 自分の持ち物を「部屋が片付かないから捨てろ」と言われ、無理やり片づけをさせられたこと なぜか怒っていて八つ当たりみたいになされた バイト中教わっていない仕事を頼まれた など
<b>マナー違反(7)</b> バイトに遅刻してきて謝らない バイト先の人が、自分より先に仕事から上がる時に何も言わずに帰ったこと あまり親しくないのに人の部屋を好き勝手に使い、汚したものをきれいにせずそのまま帰った など
<b>恋愛(7)</b> 好きな人を取られた 元彼のほうが好きだから別れて欲しいと言われた 浮気しようとしていた など
<b>規則違反(5)</b> 授業中に話し声がうるさい 静かにしないといけないところでふざけたり、大声で話をしていた など
<b>配慮の欠如(4)</b> 落ち込んでいる時に状況も何も分からないのにポジティブなことばかり言われた 受験期でイライラしているにもかかわらず、しょうもないイタズラで手間をかけさせられた など
<b>時間に遅れる(4)</b> 待ち合わせの時間に1時間以上遅れてきた 駅で待ち合わせをしたけどなかなか来なかった など
<b>怠慢(4)</b> 忙しいのに立っているだけで何もしないから 部活で全く努力しないでチームに迷惑をかけたため など
<b>自分の非を指摘される(3)</b> 大学の授業が急に入ってバイトに行けなくなった時に、「直前で～」と強く言われた バイト中、不慣れな作業をしていた時、自分の仕事の作業効率の悪さを怒られた など
<b>進路・将来(3)</b> 進路などについていろいろ口出しをされた 将来について など
<b>暴行(3)</b> 頭を叩かれた 酔った勢いで叩かれたりした など
<b>相手の無関心(2)</b> 友人のことで怒って話し合っていたのに相手がとても冷めていて、気持ちが伝わらず他人事のようにされてしまった 責任が大きい仕事にもかかわらずあまりにもやる気などが低かったため
<b>意見の食い違い(2)</b> 意見の食い違い など
<b>過干渉(2)</b> 演劇公演のキャストや脚本の決定に関する過干渉 など
<b>金銭(2)</b> お金を返してくれない など
<b>その他(19)</b> 他の人に話さないでと言ったのに、私の友人に話してしまった サッカーで思ったとおりにならなかった お母さんの電話の音が大きくてうるさかった 高価なものを持っていることを遠回しに自慢された 友人が気に食わなかった など

( )内は回答数



した者が28名（25%）、「やや親しい（4点）」と回答した者が31名（28%）であり、もっとも怒りを感じた出来事は、約半数が親しい間柄の他者（合計59名、53%）との間で起こったことがわかった。

怒りを感じた出来事について、自由記述方式で得られた回答を分類した。その結果を Table 1 に示す。もっとも回答の多かったものは、相手の「態度・ふるまい」に関する出来事であった。「足を組んで頬杖をつきながら、上から目線で話をされた」などの自分に対する相手の直接的な態度や、恋人が「酔っ払って自販機に向かって蹴ったり殴ったりしていた」、「友人の、空気を崩すような態度」など、自分に対する態度ではないが、相手のとった態度の悪さを目撃したことにより相手に対して怒りを感じた出来事など、合わせて18件の出来事がこれに含まれた。次いで多かった回答は自分に対する「悪口」であり、直接言われたもの、ブログなどに書かれたものを合わせ回答数は11件であった。「私が忙しい時やリラックスしたい時に電話をかけてきて、一方的にどうでもいい話を長時間話し続けていた」といった「相手の身勝手さ」に関する回答と、「自分の持ち物を、部屋が片付かないから捨てろと言われ、無理やり片づけをさせられたこと」を始めとする相手の「理不尽」な行動に関する回答は、それぞれ8件ずつ得られた。また規則のように明文化されてはいないが、人々が暗黙に共有している道徳や慣習といったものに相手が従わなかったといったような出来事は「マナー違反」とした。ここには「バイトに遅刻してきて謝らない」や「バイト先の人、自分より先に仕事から上がる時に何も言わずに帰った」といった、アルバイト先での出来事が多く見られた。アルバイトの契約には、遅刻時の謝罪や、先に仕事を終えた時の「お先に」という声かけは明記されていないはずである。しかし当然すべき行動として私たちがお互いに共有し、普通であるとか、あたりまえであると信じ従っているルールであり、これに違反したことに対して怒りを感じた者が多くいたということである。その一方「好きな人を取られた」、恋人が「浮気しようとしていた」というような、恋愛に関する直接的な被害に対して怒りを感じた出来事も7件報告されていた。その他、自分に直接的な被害が生じているとは限らない場面での相手の「規則違反」に対する怒りや、直接的な被害を受けた「配慮の欠如」、「時間に遅れる」、相手の「怠慢」などに対する怒りが見られた。

怒りを感じた出来事が起きた時、その場に第三者が居合わせたと回答した者は84名（75%）であり、そのうち37%にあたる31名は、複数他者がその場に居合わせたと回答していた。その第三者との親しさについて5件法で回答を求めた結果、「非常に親しい（5点）」、「やや親しい（4点）」と回答した者を併せ、61名（第三者が居合わせた場面の73%）が、親しい第三者がその場に居合わせたと回答していた。

## 2. 怒りの強さ、規範逸脱、怒りの表出方法の分析

### 1) 怒りの強さ

もっとも怒りを感じた出来事で感じた怒りの強さの程度を確認するために、「相手に対して怒りを感じた」、「相手に対して腹が立った」、「相手に対してムカついた」の3項目の平均値を算出した。これを「怒りの強さ」得点とした。その結果、平均は4.26（SD=.87）であり、今回の調査ではおおむね、強い怒りを感じた出来事についての回答が得られたことが確認された。

### 2) 規範逸脱の因子分析

次に、規範逸脱知覚の構造を確認するため、主因子法、Promax 回転による因子分析を行なった。その結果、2因子構造を得た（Table 2）。第1因子は「法律違反ではないが、相手の行動はその場の規律やルールに違反している」や「相手の行為は、社会規範や社会的調和を乱すものである」など、場面や立場、相手との関係など、特定の範囲内では、従うべきものとして明確に理解されている規則に関する項目で構成されていた。「相手の行為は、法律に違反している」を除く3項目は、大淵（1999）の社会的規則因子を構成する4項目に含まれる項目であり、おおむね同様の構成を示したことからこれを「社会的規則」因子と命名した。第2因子は「相手の行為は、あなたの感情に対する配慮に欠けている」と「相手の行為は、あなたの側の状況に対する配慮に欠けている」の2項目で構成されていた。これらは自分に対する相手の対人的配慮に関する項目であると考えられる。そのためこれを「対私的配慮」因子と命名した。各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は、社会的規則因子で $\alpha = .75$ 、対私的配慮因子で $\alpha = .63$ であったが、社会的規則因子に含まれる項目、「相手の行為は、法律に違反している」を除いた場合の $\alpha$ 係数は $\alpha = .77$ となるため、今後の分析には、この項目を除いた社会的規則3項目と対私的配慮2項目を用いることとした。

Table 2 規範逸脱知覚の因子分析結果（主因子法、Promax 回転）

	社会的規則	対私的配慮	$\alpha$
D07 法律違反ではないが、相手の行動はその場の規律やルールに違反している	.85	-.06	.75 *
D02 相手の行為は、社会規範や社会的調和を乱すものである	.77	-.01	
D04 相手は、その立場にいる人間がとるべきでない行動をとった	.52	.21	
D06 相手の行為は、法律に違反している	.47	-.07	
D01 相手の行為は、あなたの感情に対する配慮に欠けている	-.14	.77	.63
D03 相手の行為は、あなたの側の状況に対する配慮に欠けている	.14	.61	
因子相関行列		.35	

\* D06を削除した場合の $\alpha = .77$ 

## 3) 怒りの表出方法の因子分析

怒りの表出方法の構造を確認するために、規範逸脱知覚と同様に、21項目に対して主因子法、Promax 回転による因子分析を行なった。その結果を Table 3 に示す。第1因子は「激しく相手を非難する」や「相手の非を責め立てる」など、相手に対して感情的に怒り感情をぶつける方法と、「相手の言動に対して皮肉を言う」といった嫌味を言うことで相手に怒り感情を示す方法に関する9項目で構成されていた。第2因子は「何事もなかったかのように

Table 3 怒り表出方法の因子分析結果（主因子法、Promax 回転）

	第1因子	いつもどおり	無視	遠回し	$\alpha$
E16 激しく相手を非難する	.90	-.04	.10	-.19	.83
E01 相手の非を責め立てる	.77	-.13	.04	-.11	
E12 感情的に怒りをぶつける	.75	-.12	-.01	-.16	
E02 相手の言動に対して文句を言う	.63	-.07	-.12	.01	
E07 相手の言動に対して皮肉を言う	.63	.16	.15	.32	
E06 相手の言動の非を指摘する	.58	.00	-.26	.16	
E03 口調で怒りを示す	.52	-.33	-.05	.06	
E21 相手の言動に対して嫌味を言う	.51	.09	.21	.28	
E10 相手の言動に対して謝罪を求める	.50	.15	-.12	.11	
E14 何事もなかったかのように振る舞う	.04	.89	.03	.02	.84
E13 いつもと変わらない態度で接する	-.07	.81	-.21	-.05	
E20 気にしていない振りをして平然とやり過ごす	-.12	.66	.22	-.01	
E17 無視する	.17	-.05	.76	.07	.79
E04 何も話さない	-.31	-.19	.76	.01	
E11 相手にしない	.05	.26	.75	-.11	
E05 自分が怒っていることを遠回しに言う	-.17	-.18	.04	.87	.70 *
E09 自分が怒っていることをさりげなく言う	.16	-.06	.04	.62	
E19 自分が怒っていることを冗談っぽく言う	-.07	.22	-.16	.58	
因子相関行列		-.47	-.11	.47	
			.14	-.02	
				.04	

\* E19を削除した場合の $\alpha = .74$

Table 4 第1因子の因子分析結果（主因子法、Promax 回転）

	直接的表出	嫌味	$\alpha$
E03 口調で怒りを示す	.82	-.09	.88
E12 感情的に怒りをぶつける	.78	-.03	
E16 激しく相手を非難する	.77	.07	
E01 相手の非を責め立てる	.70	.10	
E02 相手の言動に対して文句を言う	.66	.07	
E06 相手の言動の非を指摘する	.49	.22	
E07 相手の言動に対して皮肉を言う	-.07	.97	.74
E21 相手の言動に対して嫌味を言う	.15	.52	
因子相関行列		.65	

振る舞う」、「いつもと変わらない態度で接する」のように、まるで怒り感情を抱いてなどいないかのように、いつもどおりの態度で接するという内容の3項目で構成されていた。第3因子に含まれる項目は「無視する」、「何も話さない」など、相手を無視する、または話をしないことにより自分の怒り感情を表す3項目であった。第4因子は「自分が怒っていることを遠回しに言う」や「自分が怒っていることをさりげなく言う」というような婉曲的な方法ではあるが、相手に怒り感情を伝えようとする表現3項目であった。第2因子から第4因子までは、木野（2000）を参考にそれぞれ「いつもどおり」因子、「無視」因子、「遠回し」因子と呼ぶこととした。

怒りの表出方法の第1因子に含まれる項目数は9項目であり、この因子は他の因子と比較し項目数が圧倒的に多かった。またこの因子の構成項目を検討したところ、内容的に2つに大別されると考えられたことから、これら9項目に対して、再度因子分析を行った。その結果、2因子が抽出された（Table 4）。第1因子は「口調で怒りを示す」や「感情的に怒りをぶつける」というような、明確な形で相手に直接的に怒り感情を示す項目6項目から成っており、これを「直接的表出」因子と命名した。第2因子は「相手の言動に対して皮肉を言う」、「相手の言動に対して嫌味を言う」というような、嫌味を言うことにより相手にその怒り感情をある程度明確に伝えようとする2項目で構成されていた。そのためこの因子を「嫌味」因子と命名した。最終的に怒りの表出方法は5因子構造を得た。各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は、 $\alpha = .88 \sim .70$ であったが、遠回し因子に含まれる項目、「自分が怒っていることを冗談っぽく言う」を除外した場合の $\alpha$ 係数は $\alpha = .74$ となるため、今後の分析からは、この項目を除くこととした。

#### 4) 下位尺度得点の算出

各因子に含まれる項目の平均値を算出し、これをそれぞれの下位尺度得点とした。平均値とSDをTable 5に示した。怒りの強さの平均値をみると4.26と、今回の調査では、調査対象者は比較的強い怒りの経験を報告していたことがわかった。またこの経験は、社会的規則の逸脱（平均=3.26）、対私的配慮の逸脱（平均=4.14）のどちらにおいても、比較的逸脱性の高い出来事であったことが伺えたが、怒りの表出はどれも中点を下回る、低い値であった。その中でも調査対象者にもっとも使用された表出方法は無視（平均=2.78）であり、逆にもっとも用いられなかった方法は遠回し（平均=1.99）であった。日本人にはあまり用いられないと言われる直接的表出の平均値は2.43と、今回の調査では、遠回しよりもよく使用される表出方法であったことがわかった。

Table 5 各下位尺度の平均値とSD

	平均値	SD
怒りの強さ	4.26	(.87)
社会的規則	3.26	(1.18)
対私的配慮	4.14	(.91)
直接的表出	2.43	(1.16)
嫌味	2.27	(1.29)
いつもどおり	2.73	(1.33)
無視	2.78	(1.33)
遠回し	1.99	(1.03)

#### 5) 怒りの強さ、規範逸脱のタイプと程度による怒りの表出方法の検討

怒りの強さ、社会的規則と対私的配慮それぞれの平均点を基準として、高低2群に群分けした。まず、怒りの強さ高群、低群間における、怒りの表出方法についての差異を検討するため、 $t$ 検定を行なった。その結果、怒りの

表出方法の嫌味において、怒りの強さ高群（平均 = 2.51、SD = 1.37）が低群（平均 = 1.85、SD = 1.02）より有意に高い値を示し（ $t(100.84) = 2.88, p < .01$ ）、無視においても高群（平均 = 3.10、SD = 1.35）が低群（平均 = 2.20、SD = 1.10）より有意に高い値を示した（ $t(110) = 3.60, p < .001$ ）。その他の表出方法に有意な差は見られなかった。これは直接的表出においても同様で、つまり怒りの強さによっては、直接的表出を使用するか否かで違いがないことが明らかになった。

次に、怒りの表出方法について、知覚した規範逸脱のタイプとその得点の高さの違いによる差異を検討するため、社会的規則（高群・低群） $\times$ 対私的配慮（高群・低群）の2要因分散分析を行なった。その結果、直接的表出において対私的配慮の主効果が有意であった（ $F(1,108) = 4.50, p < .05$ ）。また、嫌味において交互作用が有意であった（ $F(1,108) = 4.43, p < .05$ ）ことから、単純主効果の検定を行なった結果、社会的規則高群において対私的配慮の単純主効果が有意であった（ $F(1,108) = 15.36, p < .001$ ）。つまり、怒りを喚起した出来事が社会的規則から逸脱しており、かつ対私的配慮に欠けていると感じた時に、嫌味を言うことで怒りを表出する傾向がみられるといえる。

#### 6) 対象・第三者との親しさの程度による怒りの強さと表出方法の検討

本調査では、怒りを喚起させた対象を「見知らぬ人を除く周囲の人」と限定した。この対象の調査対象者との関係を「親しい間柄（非常に親しいとやや親しい）」と「親しくない間柄（どちらともいえない、あまり親しくない、まったく親しくない）」に分け、怒りの強さと表出方法における二者間の違いについて検討した。その結果、対象の親しさの違いは、ほとんどの表出方法において有意な差が認められなかったが、唯一、親しくない相手（平均 = 3.36、SD = 1.41）に怒りを喚起させられた場合、親しい相手（平均 = 2.25、SD = 1.00）に喚起させられた場合と比べて、無視することで怒り感情を伝えようとする傾向がみられた（ $t(92.76) = 4.78, p < .001$ ）。同様にして男女別に検討を行なった結果、男性では調査対象者全体で見られた結果と同様、無視において怒りの対象が親しくない相手（平均 = 3.01、SD = 1.41）の場合、親しい相手（平均 = 2.17、SD = 1.04）の場合と比べて高い得点が得られた（ $t(58.71) = 2.68, p < .01$ ）。しかし女性においては、無視については全体、男性と同様の傾向を示したが（親しくない相手：平均 = 4.00、SD = 1.21、親しい相手：平均 = 2.31、SD = .99、 $t(49) = 5.42, p < .001$ ）、加えて怒りの強さについても差異が認められた（親しくない相手：平均 = 4.58、SD = .53、親しい相手：平均 = 4.09、SD = .88、 $t(49) = 2.17, p < .05$ ）。この結果により、女性は怒りを喚起させた相手との親しさが、その表出のみならず、怒り感情の強さ自体にまで影響を及ぼすが、男性は相手との親しさにより怒り感情が変わることがない、という可能性が示唆された。

次に、怒りを感じた出来事が起きた時に、第三者がその場に居合わせたか否かによる表出の差異を検討した。今回の調査で得られた出来事では、有効回答112名のうち84名がその場に第三者が居合わせた（以下、第三者ありと呼ぶ）と報告しており、自分と怒りを喚起させた相手のふたりであった（以下、第三者なしと呼ぶ）と報告したのはわずか28名と、圧倒的に多くの出来事が、第三者が居合わせた場面で起きていたことがわかった。その後、この二者間で表出方法の差異を検討したところ、無視においては第三者あり（平均 = 2.98、SD = 1.27）が第三者なし（平均 = 2.18、SD = 1.35）より、遠回しにおいては第三者なし（平均 = 2.38、SD = 1.19）が第三者あり（平均 = 1.86、SD = .95）より有意に高い値を示していた（それぞれ  $t(110) = 2.83, p < .01$ 、 $t(39.03) = 2.10, p < .05$ ）。男女別に検討を行なった結果、男性では無視において第三者あり（平均 = 2.94、SD = 1.26）が第三者なし（平均 = 1.71、SD = 1.05）より、女性では嫌味において第三者なし（平均 = 3.08、SD = 1.19）が第三者あり（平均 = 1.96、SD = 1.14）より高い値を示し、それぞれの表出方法を使用する傾向の高さが示された（それぞれ  $t(59) = 3.42, p < .01$ 、 $t(49) = 3.01, p < .01$ ）。しかし、既述の通り第三者ありと第三者なしの人数に大きな違いがあるため、各人数を統制し、人数差を減少させたうえで再度検討する必要があると思われる。

第三者ありと回答した84名のうち、第三者がひとり（以下、第三者ひとりと呼ぶ）であったと回答した者は53名、ふたり以上（以下、第三者複数と呼ぶ）であったと回答した者は31名であった。第三者の人数による表出の差異を検討したところ、調査対象者全体と男性では有意な差は見られなかったものの、女性では直接的表出において第三者ひとり（平均 = 2.65、SD = 1.08）が第三者複数（平均 = 1.93、SD = .96）より有意に高い得点を示し（ $t(36) = 2.05, p < .05$ ）、その場に居合わせた第三者の人数によって、直接的な表出が使用される割合が異なる可能性が示された。

続けて、第三者の調査対象者との親しさによる表出の違いを検討した。調査対象者との関係が非常に親しい、またはやや親しいと回答した場合「親しい間柄」、どちらともいえない、あまり親しくない、またはまったく親しくな



いと回答した場合「親しくない間柄」とした。第三者が複数の場合、その場に居合わせた第三者全員が「親しい間柄」と回答した場合のみ「親しい間柄」とし、それ以外を「親しくない間柄」として以降の分析を行なった。その結果、調査対象者全体と男性では嫌味と遠回しにおいてそれぞれ、第三者が親しい間柄の場合に親しくない間柄より有意に高い得点を示していることがわかった（全体・嫌味・親しい相手：平均 = 2.33, SD = 1.32、親しくない相手：平均 = 1.65, SD = 1.06,  $t(82) = 2.21, p < .05$ 、全体・遠回し・親しい相手：平均 = 2.04, SD = .98、親しくない相手：平均 = 1.39, SD = .66,  $t(58.48) = 3.46, p < .01$ 、男性・嫌味・親しい相手：平均 = 2.60, SD = 1.46、親しくない相手：平均 = 1.67, SD = .98,  $t(39.21) = 2.56, p < .05$ 、男性・遠回し・親しい相手：平均 = 2.02, SD = .98、親しくない相手：平均 = 1.44, SD = .71,  $t(44) = 2.03, p < .05$ ）。また一方で、女性はこれらと異なり、遠回しにおいて親しい間柄（平均 = 2.06, SD = .99）が親しくない間柄（平均 = 1.29, SD = .60）より、怒りの強さにおいては親しくない間柄（平均 = 4.67, SD = .36）が親しい間柄（平均 = 4.21, SD = .92）より有意に高い得点を示しており（それぞれ  $t(36) = 2.07, p < .05$ ,  $t(30.64) = 2.17, p < .05$ ）、ここでも怒りの対象の親しさにおける怒り喚起の程度の傾向と、同様の傾向がみられた。

#### 7) 規範逸脱のタイプと程度の違いによる怒り喚起場面の分類

1. で分類した各怒り喚起場面について、規範逸脱の2つの下位尺度、社会的規則と対私的配慮の程度の違いによる再分類を試みた。怒り喚起場面を、社会的規則と対私的配慮共に高い値を示したグループ、社会的規則にのみ高い値を示したグループ、対私的配慮にのみ高い値を示したグループ、いずれにも高い値を示さなかったグループに分類した。そして両者、またはいずれかに高い値を示した3つのグループに該当する出来事をグループ別に集計し、結果を Figure 1 に示した。社会的規則と対私的配慮共に高い値を示したグループに分類された出来事のうち、もっとも件数の多かったものは「悪口」であり、該当する項目は4項目であった。それらは「ブログ内に悪口を書かれた」、「友だち数人と一緒になって自分の悪口をひそひそ言われた」などであり、悪口を、自分に対する配慮に欠けた行為と判断しているだけでなく、「その場の規律やルールに違反した行為」であり、「社会規範や社会的調和を乱す行為」と位置付けていることが伺える。

社会的規則にのみ高い値を示したグループに分類された出来事のうち、回答件数の多かったものは「態度・ふるまい」と「規則違反」であった。これらに該当する項目は各4項目であり、内訳を見てみると、態度・ふるまいには「酔っ払って自販機に向かって蹴ったり殴ったりしていた」や「友人の空気を崩すような態度」などが、規則違反には「授業中に話し声がうるさい」や「静かにしないといけないところでふざけたり、大声で話をしていた」な

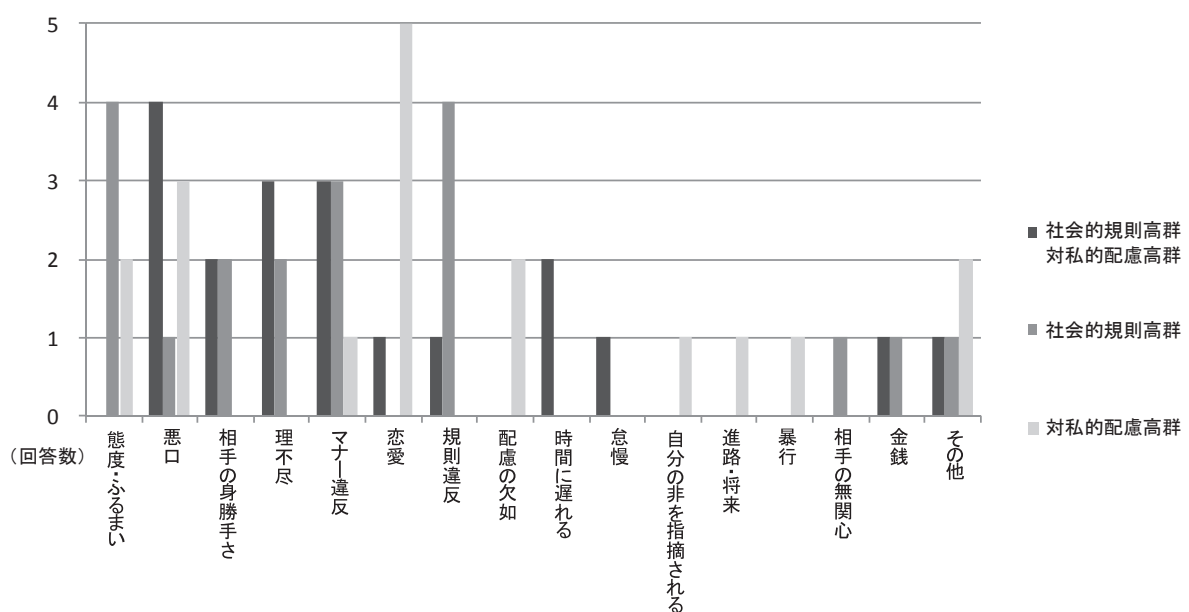


Figure 1 規範逸脱のタイプによる怒り喚起場面の分類

どが含まれていた。これらは直接的に調査対象者に向けられた態度ではないが、同じ社会を共有する者として、その行為者の逸脱行為を不快に感じた結果である。友人と時間を共にする場や大学は、大学生を取り巻く中心的な、関係性の高い社会である。その、大学生にとって関係性の高い身近な社会における他者の逸脱性の高い行為が、社会的規則に逸脱した行為として、許容しがたい出来事であると位置づけられた結果といえよう。

対私的配慮にのみ高い値を示したグループに分類された出来事のうち、もっとも回答数の多かったものは「恋愛」であった。これには「好きな人を取られた」や「元彼のほうが好きだから別れて欲しいと言われた」などの5項目が該当していた。恋愛に関する事柄は、大学生の間で非常に関心が高い。相手の行動によっては自分に対する配慮に欠けていると判断されるだけでなく、その逸脱行為が、直接自分に向けられる被害になり得る事柄でもあると言える。このことから、対私的配慮には社会的規則とは異なり、その規範逸脱の判断に個人的状況、すなわち被害の有無も関係してくると思われる。

## 考 察

本研究ではまず、大学生の怒りの喚起因を明らかにすることを目的のひとつとした。その結果、最も回答の多かったカテゴリーは態度・ふるまいであった。このカテゴリーには自分に向けられた相手の直接的な態度の悪さや、自分への被害はないが、他者の社会的規範の逸脱行為を目撃することによる怒りの経験が含まれていた。後者に含まれる項目は、恋人が「酔っ払って自販機に向かって蹴ったり殴ったりしていた」というものであった。恋人は自分にとって中心的な社会を共有する相手である。同じ規範を共有しているはずの恋人に対して人は、「相手は規則を守ってくれるはずである」という期待を抱いているはずである。そのため、自分が期待する相手の逸脱行為により、怒り感情は強いものになったと考えられる。また、アルバイト先の人間関係に対して怒りを感じたという項目がいくつかあげられており、これらはマナー違反に分類された。アルバイト先では、学生であっても一社会人として、組織の規則を遵守することを求められる。そういった状況下では、同じ組織で働いている者に対して求める規範意識が高く、自分同様相手へも規則遵守のみならず道徳や慣習の遵守をも求め、これを逸脱した者には強い怒り感情を抱くと推測される。

今回の調査で得られた「最近もっとも強く怒りを感じた出来事」において、調査対象者が感じた怒りの強さは平均で4.26であり、おおむね強く怒りを感じた経験について報告されたことがわかった。しかし、その表出の得点をみると、もっとも平均の高い方法で無視の2.78、続いていつもどおりの2.73、直接的表出の2.43であり、どの表出方法も中点を上回るものではなかった。日本人は抑制的な怒り表出方法を用いるという知見（Argyle et al., 1986；木野，2000）が得られているが、もっとも抑制的な方法であるいつもどおりであっても、高い得点は得られなかった。このことが、今回の質問で使用した木野（2000）の7種類の怒り表出方法とは別に、怒りの表出方法が存在していることを指摘しているのか、実際に使用した表出方法はこれら7種類に含まれているにもかかわらず、何らかの理由により得点に表れてこなかったためかは明らかではない。この点については、今後更なる検討が必要であると思われる。

前述のように、全体的に高い表出方法得点はみられなかったが、その中でも、感じた怒りの強さの違いや、相手の規範逸脱の知覚の程度により、表出方法にいくつかの差がみられた。第1に、より強い怒りを感じた時、嫌味や無視といった方法がより多く用いられることが明らかになった。しかし、怒りの強さによって直接的表出の使用に違いはみられなかった。このことは、直接的表出方法を使用するか否かにおいては、怒りの強さではなく、他の要因が影響している可能性を示唆している。そのひとつとして規範逸脱の知覚が考えられる。今回の調査においても、怒りを喚起した出来事が対私的配慮に欠けていると感じた場合、直接的表出が使用されていた。また、社会的規則から逸脱しており、かつ対私的配慮に欠けていると感じた場合に、嫌味を言うことで怒りを表出する傾向がみられた。相手の行動が社会的規範を逸脱していると知覚した場合、その行動に対する怒り感情には相手の不正行為を矯正し、社会的公正を回復するという正当性が伴う（大淵，1993）。そのため、感じた怒り感情をより明確な方法で表出することに、周囲の理解が得られやすく、正当な行為であると認められる可能性が高まるため、直接的表出の使用に差異が認められたと考えられる。

怒り感情の喚起とその表出の正当性が高まる要因として考えられるものに、怒り喚起の対象との親しさや、その場面に居合わせた第三者の有無、第三者との親しさなどがある。今回の調査において、有効回答の約半数が、回答した怒りを感じた出来事は、親しい間柄の他者との間で起こっていたと報告しており、また75%が、その場面に第三者が居合わせたと報告していた。怒り喚起の対象との親しさや、第三者との親しさの程度の違いによる怒り表出の差異を男女別に

検討したところ、男女ともに怒りを喚起させた対象が自分と親しくない相手であった場合、無視をすることで怒り感情を伝えようとする傾向がみられた。加えて女性においては、対象が自分と親しい間柄ではない場合に、より強い怒りを感じていた。第三者が親しい間柄の場合に、男性は嫌味と遠回しで怒りを表出するが、女性では親しい間柄の場合に男性同様遠回しを使用するが、さらには第三者が親しくない間柄の場合に、強い怒り感情が喚起されることがわかった。このことから、怒りの喚起対象や第三者との親しさの違いによる表出の差異において、男性と女性では異なる傾向がみられると結論づけられる。男女ともに対象が親しい間柄でない場合は無視という方法で相手に怒りを伝えようとする。そして第三者が親しい間柄であると遠回しに伝えることを試みる。しかし女性に限っては、対象や第三者が親しくない間柄の場合、強い怒りを感じる。女性は「親しさ」が怒り感情の表出だけでなく、感情そのものにまで違いをもたらすが、男性においては親しさの影響は見いだせなかった。

本研究において、第三者の存在や、怒りの対象や第三者との親しさが、怒りの表出方法の使用に差異をもたらす可能性が示唆された。しかし、第三者の有無について、二者間に大きな人数差がみられたことから、単純にこの二者を比較することはできない。今後は喚起場面を操作したうえで、第三者の有無やその親しさを比較し、更なる検討を進めていく必要があると考えられる。

## 引用文献・参考文献

- 阿部晋吾・高木 修 (2003). 自己効力と結果予期が怒り表出反応としての攻撃行動、および認知的再評価に及ぼす影響 犯罪心理学研究, 41, 15-27.
- Argyle, M., Henderson, M., Bond, M., Iizuka, Y., & Contarello, A. (1986). Cross-cultural variations in relationship rules. *International Journal of Psychology*, 21, 287-315.
- Averill, J.R. (1982). *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: Springer-Verlag.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Berkowitz, L. (1962). *Aggression: A social psychological analysis*. New York: McGraw-Hill.
- Bushman, B.J. (2002). Does venting anger feed or extinguish the flame? Catharsis, rumination, distraction, anger, and aggressive responding. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 724-731.
- Dollard, J., Doob, L.W., Miller, N.E., Mowrer, O.H., & Sears, R.R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven: Yale University Press.
- Frodi, A., Macaulay, J., & Thome, P.R. (1977). Are women always less aggressive than men? A review of the experimental literature. *Psychological Bulletin*, 84, 634-660.
- 日比野桂・湯川進太郎 (2004). 怒り経験の鎮静化過程: 感情・認知・行動の時系列的変化 心理学研究, 74, 521-530.
- 木野和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 心理学研究, 70, 494-502.
- Matsumoto, D. (1990). Cultural similarities and differences in display rules. *Motivation and Emotion*, 14, 195-214.
- 大淵憲一 (1993). 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学— サイエンス社
- 大淵憲一 (1999). 怒りと社会的認知: 自己利益の侵害と規範逸脱の知覚 東北大学文学部研究年報, 49, 213-224.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1984). 怒りの経験 (1): Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況 犯罪心理学研究, 22, 15-35.
- 高木 修・阿部晋吾 (2006). 怒りとその表出に関わる心理学的研究の概観 関西大学社会学部紀要, 37, 71-86.
- 湯川進太郎 (2005). バイオレンス—攻撃と怒りの臨床社会心理学— 北大路書房
- 湯川進太郎 (2008). 怒りの心理学—怒りとうまくつきあうための理論と方法 有斐閣